

「書くこと」の 授業をつくる本

授業づくりに役立つ本、授業とからめて生徒に読ませたい本などを紹介するリレー連載。今回のご担当は、渡辺光輝先生（お茶の水女子大学附属中学校教諭）です。



お茶の水女子大学附属中学校
教諭

わた なべ こう き
渡辺光輝

1976年、千葉県生まれ。千葉大学大学院修了。共著書に『中学生を作文好きにする！新レシピ60&ワークシート』（明治図書出版）など。

初任以来、二十年間没頭してきた「書くこと」の授業づくりについて、その発想のもととなった本とともに振り返ってみる。

■初任時代

「良い文章とは、自分にしか書けないことを、だれが読んでもわかるように書いた文章」（『高校生のための文章読本』）。これが、私の「書くこと」指導の原点だ。クラスのアさんに「しか」書けないことを探し、それを引き出すための声かけや、題材の与え方などの工夫に没頭した。毎年文集を編み、生徒と読み合い、楽しんだ。

『言語表現法講義』は、自分の文章観を形成した、思い出深い一冊。「言葉を書くことは、よりよく考えるための、自分と向かい合う経験の場なのだ」などの言葉に目を開かされた。以後、安易に生徒の文章を「添

削」することに恐れを感じるようになった。『新作文宣言』で紹介される、工業高校の作文の授業の数々からは、書くことによって、ここまで人は自由になれるんだと衝撃を受けた。

■六年目

理想的な文章だけでなく、実用的な文章を書くことのトレーニングの必要性を感じ、さまざまなジャンル、メディアでの実践にチャレンジし始めた。その発想のもととなったのが『理科系の作文技術』。この本との出会いも大きな出来事だった。

書き手に、わかりやすく伝える表現技術がなければ、その文章は独りよがりなものになってしまう。ひいては、不親切で不誠実だとさえ読み手に受け止められかねない。だから、技術を軽視してはいけない。

自分の思いをしつかり相手に届けるためには、何を学び、身につけなければいけないのか。この本をきっかけに、表現技術について、もっと考えようと思い始めた。

■十五〜二十年目（現在）

これからは、「書き手の思い」の表出という視点だけでなく、「読み手の認知の特性」まで考慮した「書くこと」の学習を模索していきたい。今、着目しているのが「テクニカルライティング」だ。マニュアル表現などで活用されているその技術は、認知心理学の分野で研究が進みつつある。つい先日、認知心理学者と一緒に「紅茶のいれ方マニュアル」の授業をつくり、生徒たちと楽しく取り組んだばかりだ。社会につながる書く力を育てるために、さまざまな知見を応用した授業を模索していきたい。



理科系の作文技術

木下是雄 著
中央公論新社／1981年

「文系の文章」を小説や随筆とするならば、「理科系の文章」とはレポートや説明文、報告書などの実用的な文章を指す。本書は、その実用的な文章に必要な作文技術を説く。アカデミックライティングの基本文献。



心理学者が教える 読ませる技術 聞かせる技術

心を動かす、わかりやすい表現のコツ
海保博之 著
講談社／2018年

筆者は「わかりやすい文章の仕組み」について認知心理学の見地から研究してきた認知表現学の第一人者。わかりやすい文章を書くために不可欠な、読み手の認知の特性に配慮した表現のコツが凝縮された1冊。



言語表現法講義

加藤典洋 著
岩波書店／1996年

批評家、加藤典洋が大学で学生を相手に指導した「言語表現法」の講義録。学生が実際に書いた文章に、加藤氏がコメントしつつ「書くことというのはどういう経験なのか」を明らかにしていく。



新作文宣言

梅田卓夫・清水良典・服部左右一・松川由博 著
筑摩書房／1996年

愛知県の工業高校の4人の国語教師が取り組んだ、「作文」の可能性を限界まで広げた実践の記録。「最初の記憶」を思い出して書く、「水の入ったコップ」をひたすら眺めて言葉で描写するなど、とにかく楽しい。